

第32回

東京大学 環境安全研究センター
シンポジウム

Environmental
Science
Center

水・土・生物から考える 環境の化学

2024年

2/20 火

13:00-16:30 (開場12:20)

主催：東京大学 環境安全研究センター
<https://www.esc.u-tokyo.ac.jp/relations/symposium/>

東京大学 工学部5号館1階 51号講義室
(東京都文京区本郷7-3-1 東京大学本郷キャンパス内)
https://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam01_04_06_j.html

+ Zoomによるオンライン配信

13:00-13:10 歓迎挨拶

東京大学 理事・副学長 齊藤 延人

13:10-13:20 趣旨説明

東京大学 環境安全研究センター 教授 北條 博彦

13:20-14:05 講演1「湖沼の健全な物質循環をめざす」

滋賀県琵琶湖環境科学センター 早川 和秀

14:05-14:50 講演2「みどりの食料システム戦略に基づく国内有機性
資源の肥料化とその課題」

農業・食品産業技術総合研究機構 荒川 祐介

14:50-15:10 休憩

15:10-15:55 講演3「重金属元素の生体濃縮と生体鉱物化現象」

千葉大学 大学院理学研究院 沼子 千弥

15:55-16:25 パネルディスカッション

モデレータ 北條 博彦

16:25-16:30 閉会挨拶

東京大学 環境安全研究センター長・教授 辻 佳子

参加申込み

以下のURL、メール、あるいはFAXにより、2月16日(金)までにお申込下さい。

<https://forms.gle/PhYzrxZA7iECCHrE7>

お問い合わせ先

東京大学 環境安全研究センター 環境安全研究センターシンポジウム係 宛

〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番1号 TEL: 03-5841-2972 FAX: 03-5841-1233

電子メールアドレス: 2023escsympo@esc.u-tokyo.ac.jp

参加費
無料
(要事前登録)





早川 和秀 氏

滋賀県琵琶湖環境科学センター 総合解析部門部門長

閉鎖性水域である湖沼は、水質保全対策によって、汚濁物質の流入負荷量は減少傾向にあるものの、環境基準であるCODの高止まり、アオコの発生や在来魚介類の減少等といった問題が依然として発生している。さらに近年は、植物プランクトンの異常増殖や底層溶存酸素濃度の低下といった新たな課題が確認され、気候変動との関連が強く懸念されている。講演では、琵琶湖を例に、上記の状況や湖沼の健全性や物質循環についての研究を紹介する。



荒川 祐介 氏

農業・食品産業技術総合研究機構 研究推進部 技術適用研究チーム長

わが国では、主に海外で施肥し栽培された飼料を輸入して畜産物を生産することで年間約8千万トンの家畜排せつ物が発生している。また、生活排水として下水道には年間約5.5万トンのリンが流入しているが、そのうち肥料として有効利用されているものは約0.6万トンに過ぎず、残りは埋立等により廃棄されている。本講演では、家畜ふん堆肥や下水汚泥を原料とした肥料開発の現状と課題を整理し、資源循環に係る今後の研究課題について議論したい。



沼子 千弥 氏

千葉大学 大学院理学研究院 准教授

地球表層の環境や生物に含まれる物質は、溶存状態や固体状態など様々な存在状態を持ちながら混在している。生物が生体濃縮により元素を特異的に取り込み、無機固体化して蓄積したり硬組織を形成したりする生体鉱物化現象は、生物が持つ有機物によって行われる無機材料合成として捉えることができ、非常に興味深い。ここでは、生体鉱物化現象の概説と、興味深い生体鉱物の例としてヒザラガイが形成する磁鉄鉱を主成分とする歯について述べる。

■東京大学本郷キャンパス 工学部5号館1階 51号講義室 案内図

〈アクセス〉 東京メトロ南北線 東大前駅より徒歩 10分 東京メトロ丸ノ内線 本郷三丁目駅より徒歩 15分
東京メトロ千代田線 根津駅より徒歩 10分 都営地下鉄大江戸線

